

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

- 「考え、議論する道德の授業づくり」を“道德バトンリレー”を通して進め、教師の授業技術やコーディネート力の向上など、“Students First”の授業改善を推進した。
- 毎時間の授業ワークシートを積み重ねたポートフォリオ評価を主軸に、生徒をとらえ、よさを伸ばすことができる評価を試みた。

1 研究推進校（又は推進地域）の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	生徒数	備 考
扶桑町立扶桑北中学校	丹羽郡扶桑町高雄福塚10	0587(93)6452	417人	

2 研究課題

(1)「考え、議論する」道德の授業づくり

- ア 生徒が主役で「語りたい・聴きたい・考えたい」とのめり込む学習指導の展開
- イ 多様な指導方法の工夫や発問、話し合いの工夫など、教師の授業技術やコーディネート力の向上
- ウ 指導のねらいや内容に照らした個々の道德性を見取りの工夫

(2) 生き抜く力を身に付けようとする生徒を育む道德教育

小中連携や中中連携、生徒の道德的実践力の育成の基盤となる地域・家庭との連携の取組

3 研究主題とその設定理由

(1)研究主題

「 生徒をとらえ、よさを伸ばす『道德科』の評価の在り方 」
ー 考え、議論する道德の授業づくりを通して ー

(2)主題設定の理由

本校では「進取」を校訓に「FKC魂が輝く生徒の育成」を目指して、教育活動を進めている。FKC魂とは、【F】扶桑 Fresh さわやか【K】北 kind 思いやりのある【C】中学校 Creative 創造的なを表し、本校が伝統的に大切にしている言葉である。本校は、生徒数 417 名、教職員数 42 名の中規模校である。4～5年ほど前は、家庭と学校との信頼関係が上手く築けず、生徒の“荒れ”が前面に出ている学校であった。しかし、教員のチーム力で、地道にきめ細やかな対応を心がけることで、現在は生徒指導事案も少なくなってきた。生徒の多くは、教師の指示を素直に受け止め、言われたことには熱心に取り組むため、満足感を覚えている。しかし、個々に目を移すと、自主的な行動や自らの判断、自己決定を求められる場面では、つい周りに目をやる姿や一歩が踏み出せずにいる生徒が多いように感じる。さらに、パソコンやスマートフォンの普及によって、生徒たちのメディアへの依存度が増してきており、生活リズムの乱れや人との距離の取り方など課題が多く、友人関係のトラブルに陥っていることが多々見受けられる。また、不登校生徒の存在も大きな課題である。未来ある生徒たちには、自他ともに良さを発揮し、繋がりあって課題を解決していく力が求められている。

本校では、平成 27 年度、道德の教科化に向けての第一歩として、道德の授業での教師の力量向上を目指した。各学年で授業実践をリレーのように繋ぐことで、課題を明確にし、次の授業へバトンを渡していく授業改善に取り組んだ。このようにして、最終学級での授業では学校全体で研究協議を行う「道德のバトンリレー」を展開した。その結果、教師間では、学級の生徒としっかりと向き合える道德の授業の良さが分かり、協働し合う授業研究の楽しさが体感できた。

一方で、「考え合う」場面を設定するための中心発問の難しさを課題と感じ、子どもたちが思考を深め、考えを表出し合う「考え、議論する」道德の姿には、自分たちの授業はほど遠い位置にいることを自覚するに至った。教師の指導技術の向上はもちろんのこと、一人一人の生徒を多面的にとらえ、その生徒のよさを引き出すような道德にするために、ポートフォリオ評価などを取り入れ、「考え、議論する」道

徳に向けて一層の研修の必要性を痛感しているのが現状である。

そこで、本年度は、昨年度の取組を基に、年間 35 時間の道徳授業を「道徳のバトンリレー」を主軸に進めていくことや、そのための教材を掘り起こすことに重きを置くこととした。中学校では、教科の授業はカリキュラム通りに実施するが、道徳の授業は手を抜いてしまう傾向にある。また、若手教員も多く、経験値では太刀打ちできず、ワンパターンな授業展開に陥りがちである。そのため、学年で教材を検討し、道徳のバトンリレーを展開することで、さまざまな指導方法や発問、話し合いの工夫など、教師の授業技術やコーディネート力を高めることで、どの教員も道徳の授業を「やってみたい」と意欲的に取り組むことができると考えた。さらに、これらの一つずつ積み上げれば、ポートフォリオ評価や自己評価などを取り入れた生徒のよさを伸ばす「道徳科」の評価の在り方につながると考える。そして、生徒が自分を見つめ、他者を見つめ、自己理解、他者理解につなげ、学んだ道徳的な価値を生かしてこれからの社会を生き抜く力を身に付けることがねらいである。

平行して、校区内の小学校とも連携し、研究授業前の模擬授業を行い、小学校教材と中学校教材のつながりを検討したり、9年間を見通した道徳授業の展開を協議したりしてきた。その中で、一人ひとりに丁寧に対応する小学校教員の力を中学校教員は見て学んだり、中学生が赤裸々に本音を語る授業から、小学校教員も子どもの成長をイメージした授業展開を考えたりすることができた。そのため、町内の中学校とも中中連携を進め、教科以外のさらなる小中連携・中中連携のあり方や、生徒の道徳的実践力の育成の基盤となる「地域・家庭」との連携をどのように工夫していくのかも研究課題として取り組んでいく。

4 研究の概要

(1) 目指す生徒像

友の声を傾聴し、目を輝かせて吾を語る生徒

- 教材の事象を自分事としてとらえ、自分の言葉で語る生徒
- 教師や仲間の声を聴き、多面的・多角的に考え、話し合う生徒
- 話し合いを通して、再度自己の考えや思いを見つめ、それを深めることができる生徒

(2) 目指す教師像

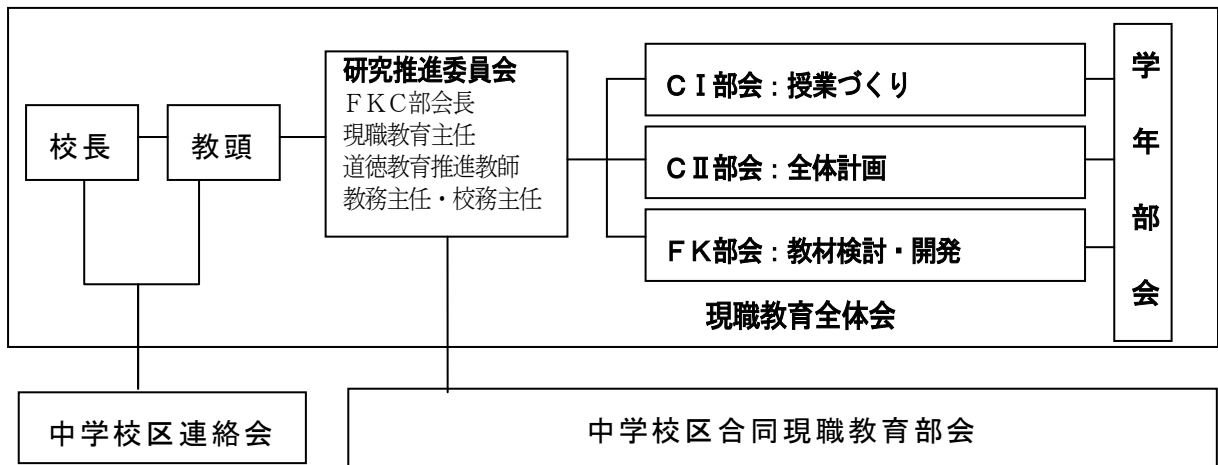
人間の弱さを認め、それを乗り越えることのよさを共に考える教師

- 生徒のよさに光を当て、受け止め、認め、生徒理解を進める教師
- 生徒とともに考え、悩みながら、吾を語り、成長しようとする教師
- 生徒が本音で吾を語るための教材の開発、授業づくりに邁進する教師
- 授業における生徒同士の思いや考えをつなげ、深め、広げるためのスキルを身に付けた教師

(3) 研究仮説と手立て

「考え、議論する」道徳の授業づくりを進めていけば、生徒一人一人が自己理解・他者理解を深め、道徳的な価値を理解するだろう。そして、これからの社会を生き抜くための道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度が育つだろう。

(4) 研究組織



(5) 全体構想

「考え、議論する道徳」のためのグランドデザイン

「特別の教科 道徳」の目標

道徳的な価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、
自己の生き方（人間としての生き方）について考える学習を通して

道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度を育てる

成長実感



工夫改善

FKCみんなで
一緒に産み出す
“Students First”
の道徳の授業

個のよさを伸ばす

ポートフォリオ評価

授業実践

記録
座席表

学年道徳バトンリレー

工夫改善

授業実践

授業技術
板書
発問

抜本的改善・充実

道徳道場
模擬授業

道徳的な価値
（内容項目）
手順シート

吾を語る

考え、議論する
道徳の学習

自己の考えや思いを
見つめ深める

多面的・多角的に
考え話し合う

自分事として
とらえる

【生徒の実態】 道徳アンケートより（「そう思う」の回答）
○自分で考え判断し実行し、その結果に責任をもてる。
○互いに励まし合い、高め合う友だちがいる。
○自他の命を大切にすることができる。
●道徳の時間では自分の意見を友だちに伝えている。
●自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、
謙虚な心で他に学び、自ら高めることができる。
●難しいことでも失敗を恐れずに挑戦している。

H28. 6月実施)

【A-（1） 自主、自立、自由と責任】

53%

【B-（8） 友情、信頼】

59%

【D-（19） 生命の尊さ】

63%

26%

【B-（9） 相互理解、寛容】

20%

19%



【生徒の振り返り】

実践2 2年 ～ねらいを明確にして思考を深める板書の工夫・改善～

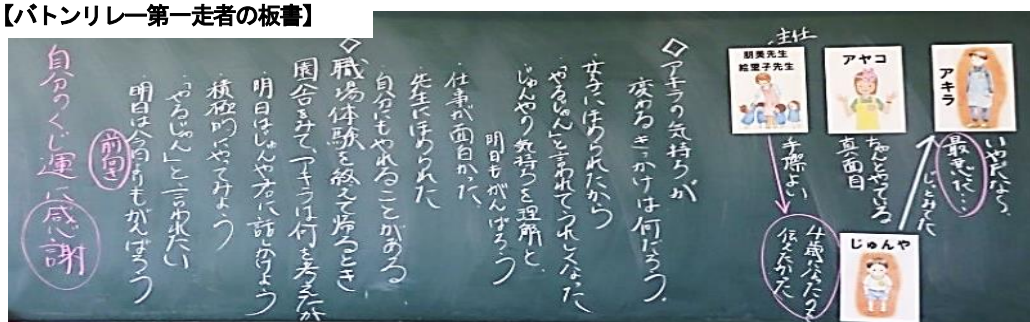
2年生では、「アキラのくじ運」という教材で道德バトンリレーを行った。中学生にとって漠然としか理解できていないC-(13)「勤労」とは何かを考えていくことをねらいとした。

自分が希望していない幼稚園に職場体験に行くことになった主人公のアキラは、最初幼稚園で働くことに対して消極的でした。しかし、園児とのふれあいや先生たちからの言葉をきっかけに、職業体験を通して、働くことの喜びを感じる。

最初に授業を行った3組では、中心発問を、話の最後の職業体験から帰る場面で「アキラは何を考えたか」とし、授業を行った。しかし、この発問では、「明日は、今日よりも頑張ろう」など、ねらいとする勤労の価値よりも、向上心につながる意見が多くなってしまった。次の4組では、中心発問をアキラの気持ちの変容に注目し「アキラは何に気付いたか」とした。この発問に変えたことで、働くことのやりがいなど、勤労に目を向ける生徒が増えた。しかし、「何に」ということにこだわりすぎ、正解を探し出すことに意識が向いてしまう生徒もいた。そこで、1組では、中心発問を「アキラは捉え方が変わった。何に気付いたのだろう」とし、アキラの気持ちの変容に着目できるような問いにした。すると、勤労につながる考えが多く出てきた。しかし、導入で主人公の最初の仕事に対するマイナスな気持ちを押さえていなかったため、ねらいとする価値に迫ることが不十分となってしまった。1組の授業の後、松井伸市先生からは、「中心発問が1つあれば思った通りに生徒が考えて発言してくれるという思い込みが教員の意識にある。中心発問だけ取り出すのではなく、中心発問に至るまでのステップをもっと考えるべきだ」と助言していただいた。松井先生の助言をもとに、最後の2組では、アキラの気持ちの変容ではなく、アキラの保育士に対する考えの変容に注目させた。保育士の仕事は、女性が行うというイメージや、小さな子供と関わることは大変そうなどといった保育士のイメージを確認した上で、「アキラの仕事に対する考え方はどのように変わっていったのだろう」という中心発問につなげた。その結果、「マイナスのイメージがプラスのイメージに変わった」などといった、ねらいとする「勤労」に対するアキラの変容に生徒自らが気付くことができた。

板書はイラストで関係性を示すだけでなく、主人公のイラストをやる気のない表情から、明日があつてよかったと期待する表情に変化させることで、より主人公の変容を視覚で理解できるように工夫した。生徒の意見をただ書き連ねただけで、十分に整理されていない板書から、生徒の発言に囲みをつけたり、イラストを変化させたりするなど、工夫が生まれた。授業展開を意識して板書を構造的にし、生徒の思考を深めることが大切であるという意識に教員が変わっていった。これも、ねらいとする価値について教師が明確に意識し、授業展開やそれに伴う板書を工夫・改善してきたバトンリレーの成果である。

【バトンリレー第一走者の板書】



【バトンリレーアンカーの板書】



実践3 3年 ～自分事としてとらえ吾を語る授業の工夫・改善～

3年生では、「真夏の雨」C-(15)で道徳バトンリレーを行った。第一走者の2組、第二走者の3組で授業を行うことで、物語の内容を生徒に分かりやすく伝える方法や、立場を明確にすることで考えを深める方法などを学年で話し合い、第三走者の1組につなげた。そのため、「目を輝かせて吾を語る」生徒の姿を随所で垣間見ることができた。

ハンドボール部のキャプテンとして、最後の大会に挑むレギュラーを誰にすべきか、コーチから意見を求められた主人公。「真面目で努力家だが、試合慣れせず単純なミスの多い亮子」か、「無断欠席があり自分勝手だが、技能が高いエースのあゆみ」か、選択に悩む。「あゆみのほうがいい」とコーチに結論を話すも、心は揺らいでいた。オーダー発表の後、肩を落として涙ぐむ亮子の姿に「本当にこれでよかったのか」と自問を繰り返す。

生徒Aが「試合に負けて、亮子が責められないためにも、あゆみを出すべき」と言った際に、生徒Bが「責めるなんて、そんなのチームじゃない」と強く主張した。野球部員である生徒Bは、ちょうど授業を行った時期に亮子と同じ立場にあった。自分の経験を踏まえて、生徒Bの本心から出た言葉だからこそ、周りの生徒も心を揺さぶられ、クラス全員が自ずと拍手をした。教材の事象を自分事としてとらえ、自分の言葉で語る姿が現れた。中心発問では、「みんなが気持ちよく終わるために、何かできることはないか」と問うたところ、亮子やあゆみ、チームメイトなど立場を変えて、考えを深めようと生徒同士で話し合う姿が見られた。授業後には、生徒Bが言い足りなかったことを担任に話しに来たり、レギュラー争いのない文化部の生徒が、教卓の周りに集まり亮子について熱く議論したりするなど、道徳の時間に活躍した生徒だけではなく、発言ができなかった生徒も考えを深め、吾を語る姿が見られる授業となった。

アンカーの4組の授業では、中心発問に「あなたがこのチームの一員なら」という文言を追加し、自分事で多くの生徒が考えを深められるように改善した。「精一杯やれることをやった結果なら、みんな満足する」というチームメイトの気持ちから入る意見や、「大量のリードをして亮子が出やすい環境を作ることで、亮子も責任を感じずに試合に挑めるだろう」という亮子を気にした意見が出るなど、多面的に考えることができた。

その後、京都産業大学の柴原弘志先生から、「語りは吾の言葉、話すは舌先三寸」という言葉をいただいた。道徳の授業では、生徒が発する言葉が、表面上の意見発表になっているのではなく、自分の言葉で語ることができているかを教師が判断して、評価するべきであると指導していただいた。

このように、道徳のバトンをつないで授業改善を繰り返し、生徒が考えを深め、議論が深まる中心発問にすることで、吾を語る姿が見られる授業へと変化しつつある。



【対話的な学び】



【自分事として語る】



【立場をかえて多面的に語る】

～生徒をとらえ、よさを伸ばす評価の試み～

評価への取組は着手し始めたところである。道徳の評価は、生徒一人一人を捉え、個のよさを伸ばすものでありたい。3年「ジョイス」A-(5)真理の探究で試みた例をあげる。

完全試合達成目前のガララーガに対して、誤審をしてしまった審判ジョイス。ジョイスは完全試合を不意にされたガララーガに誤審を謝罪し、翌日、同カードの主審を務める。ジョイスの登場に観客はブーイングの嵐だった。しかし、ガララーガがメンバー表を持ってジョイスに歩み寄り固い握手を交わすと、ブーイングは次第に拍手へとかわっていった。

《Step 1 事前意識を探る》

効果的に授業のねらいに達成するために、係の仕事や与えられた役割にどんな姿勢で取り組んできたか、生徒の意識を事前に探った。その結果を座席表に書き込み、授業での発言の様子やワークシートへの記述内容と比べながら、教師が生徒の本音を引き出す一助とした。

《Step 2 授業の中で》

本時のねらいを理解し、自分事として捉えているか、対話的な学びの話し合いに参加しているか、多面的・多角的に考えているかなどを、生徒の行動から観察した。

《Step 3 授業を終えて》

授業の最後には、必ず、本時の振り返りをワークシートに書き、自分の考えをまとめてきた。「どう考えが変容したか」「どう考えが深まったか」を文章表現から分析することが、本時の学習状況を見取る大切な材料となると考えた。

《Step 4 積み重ねる》

ワークシートは、毎時間回収して朱書きを入れ、生徒理解を深めるものとしている。道徳ファイルに綴り積み重ねることで、個の変容を時系列で俯瞰するポートフォリオ評価としていきたい。

《Step 5 個のよさを広める》

生徒の考えのよさや多様性を広めるため、学級通信などで生徒の記述を紹介した。授業後の他の生徒の考え方を
 知ること、自分の考えをさらに深め発展させることも
 できると思われる。

《Step 6 前期を振り返る》

長期的な成長を実感するために、前期（４～９月）の振り返りを行った。毎週の道徳の授業実践の積み重ねによって、道徳で学び合うことの価値に気付いている記述が多く見受けられた。そのため、自分の成長を実感できる足跡となるものとして、大切に保管させている。

前期の道徳では、たくさんの人の難しい感情が理解できた。このような場面に偶然出会うかもしれない。そんなことを思って生活していると、あの人は今、何を思っているのだろうと人の心を読み取る力がついてくる。道徳の時間は、奥底に眠っている深いことを見つけ出す不思議な時間だ。
(2年生男子)

I S 仕事を理解せず。まじめにやっていなかった。	N Y やりたくないことはやらない。
K H できるだけしっかりやろう。	I N 一生懸命やってきた。甘えることもあった。
S H 面倒なのは嫌々やっていた。	M C やるべきことはやってきた。時々面倒だった。

【座席表】

間違いを犯すと批判があり嫌な気持ちになるが、それに向かい合うことが大切だ。見ている立場で批判するばかりでなく、その人の気持ちになって物事をとらえ、共感し認めることも必要だ。自分は1回思ったことをなかなか変えず、批判ばかりしているので、批判された人の気持ちになって考えたい。

【本時の振り返り】

1 これまでの道徳の授業を振り返り、印象に残った授業を2つ選び、資料名と、なぜ印象に残ったのかを具体的に書きましよう。

資料名	「車いすの少年」
理由	私は今まで、困っていた人を見つけたら、すぐに助けにいくことを「イケバ」だと思って、思っていたが、この授業で、「見守り」ことも時には必要だと知り、これにたいして、まず手から、人々がどう思っているか、人間にふさわしいこととあって思ひます。いろいろな思いがありあまた合がりました。
資料名	「甲子園でプレーしたい」
理由	夢を追うか、友情、友情、友情。その3つの選択とすることが、私にもあるかもしれない。でも、本当の夢、というの、自分の心で「夢」が、夢、をかなえてもらえることと知れば、それこそが、夢、に思ひます。よさうなことに、共に、夢に、向かっていけばいいと思ひます。

2 次の項目にあてはまる番号に○をつけますよう。

	そう思う	思わない
・自分の考えを仲間に伝えることができた	4・③	2・1
・仲間の発言をしっかりと聞くことができた	④・3	2・1
・道徳の授業で自分を見つけるきっかけになった	4・3	2・1
・道徳の授業で新しい発見があった	④・3	2・1

3 前期の道徳を振り返って、今後の生活に生かしていきたいことはどんなことですか。

これから、生きていく中で、道徳の授業に出るようになる（場面）があるとき、学んだことを生かして、自分の中でいかに考え、行動していきます。今までの自分の考えを、それが「正解」とは思いません。もっと色々な視点から物事を考えていけるように、努めます。

先生からのコメント

【前期の振り返り】

公開授業・道徳を語る会・講演会（11月15日実施）～町全体で学ぶ～

各学年の道徳バトンリレーで培った成果を伝える場として、町内の小中学校の先生方に参加していただき、全公開の授業参観と道徳の授業について協議する「道徳を語る会」を実施した。単なる授業参観ではなく、町内の小中学校で同じ歩調で道徳の授業を進める意識を高め、実践を進めるきっかけとしたかったため、公開授業を一つの教室でじっくり参観して気付いたことを付箋に記入していただき、それを基に参観教室で協議を進めた。「小学校の先生方からの視点がとても参考になった」「特別支援学級の担任をしてみえる方がほとんどで、具体的に展開例や発問の改善例を教えていただき大変参考になった」など、私たちにとって



【道徳を語る会】

も、参加者にとってもさまざまな視点から道徳を語り合う貴重な機会となった。このように、町全体に発信し共に学ぶことで、道徳の教科化に向けてさらに推進することができたと思われる。

（２）今後の課題と取組

本校の道徳の授業は、一年かけてやっと一つの形にたどり着くことができた。しかし、公開授業の直後に柴原先生が推薦する道徳名人の授業をDVDで鑑賞した際には、職員の胸に以下のような思いが湧き上がった。

- ・書くばかりが全てではないので、“生徒が語る”授業づくりをしたい。
- ・私たちがどこまで内容項目を深く捉えるかが鍵。
- ・たくさん書かないで考えさせる。どんどん問い返していく。でも、教師と生徒が一對一にならないように。
- ・教材の読み込みと授業スキルがもっと必要。
- ・今、自分がやっている授業とは全く違うものがあつた。自由な雰囲気、自分の言葉で話している姿がすごく良かった。生徒の立場からすると、予想のつかない流れが飽きをこさせないのかと思った。

また、後日、校内で「道徳を語る会」の環流会を行った。改善点が書かれた付箋をもう一度見直し、協議の内容を報告し合った。下表は指摘をいただいた内容である。

- 一人一人が意見を持っているからこそ、もっと発表できる場面の設定が必要である。
- 中心発問では、問い返しによりねらいとする価値まで迫れていた。しかし、教師と生徒との一對一のやりとりが多かった。周りで互いの意見を共有すると良い。
- 三角柱の使用により生徒の意見が良く出ていたが、教師が意見をどうつなげて価値に迫っていくのかも大切である。
- 自分事として最後に振り返る部分が不十分である。
- テーマが「議論する道徳」となっているが、「議論する場面」が確実に設定できていない。

これを受けて

- ①「生徒同士の必要とされる対話」の場面を取り入れること
 - ②生徒の発言にもっと揺さぶりをかけたり、生徒間に任せたりし、教師のコーディネート力を高め「Students First」の授業を貫くこと
 - ③生徒の振り返りが教師のねらいのための振り返りではなく、生徒の考えを深めるものとなっているかを見極めること
- など、今後の課題を共有した。



【環流会の様子】

「ワークシートの工夫がされていて良い」「同じ立場の生徒が起立して、生き生きと相互指名で考えを述べていた」「全員が三角柱で意思表示を行い、立場を明確にしている」「積極的に相手の意見を聞こうとする姿勢が見られる」など、参観者からある程度の評価をいただいた。これは、週1時間の道徳の授業に真摯に取り組み、生徒の個のよさを伸ばそう、生徒も教師も成長実感を味わおうと日頃から道徳の授業実践を積み重ねてきた成果といえる。また、生徒のみならず教師自身も「道徳が楽しい」と語る姿をあちらこちらで見ることができるようになった。今後も、「考え、議論する道徳の授業」を追究し、“吾を語る”生徒の姿をさらに追い求めていきたい。